

# 石塚貝塚における地形改変と久永春男らによる調査地点の検討

村上 昇

## 1. はじめに

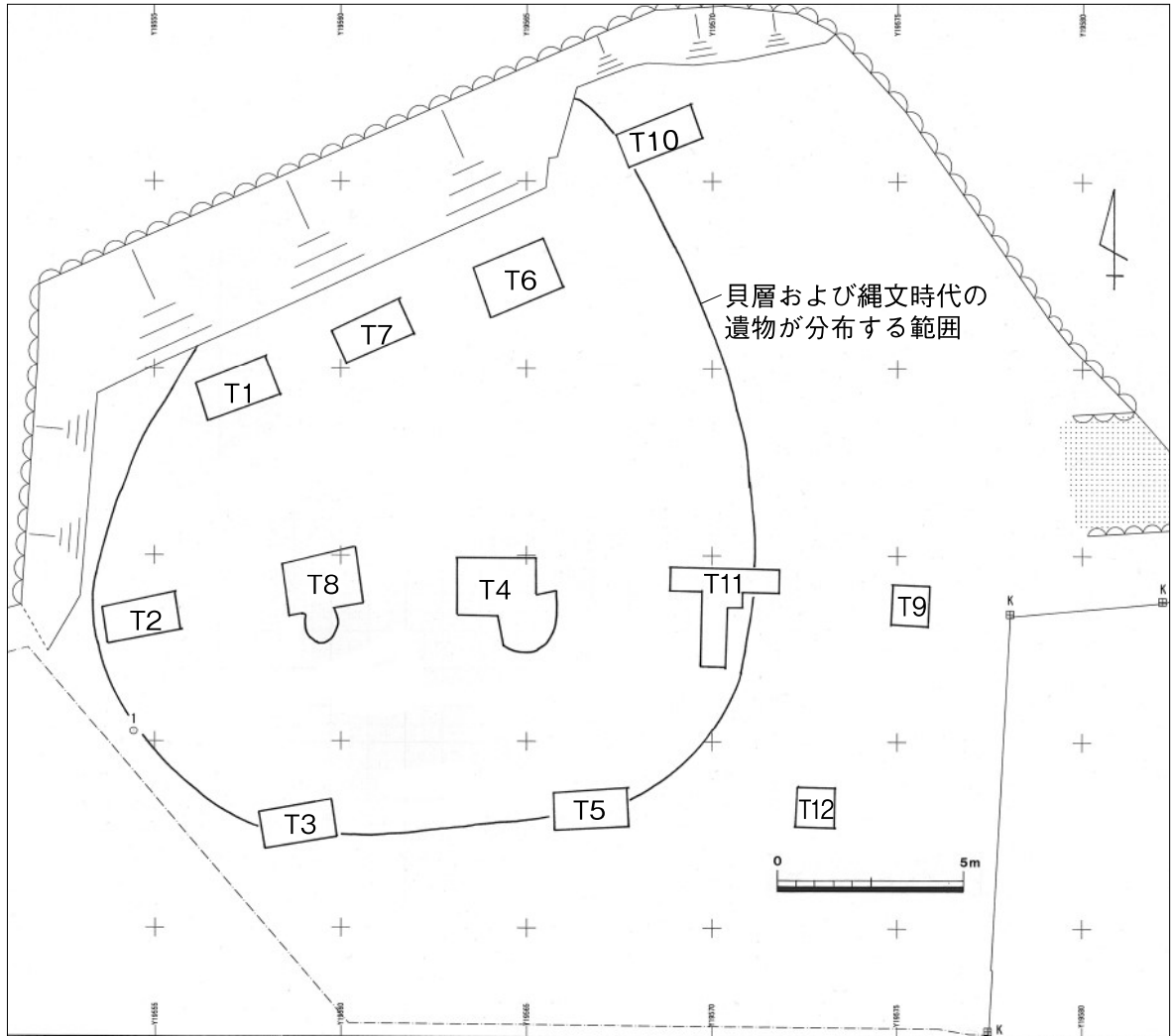
石塚貝塚は、豊橋市花田町字石塚に所在する縄文時代前期の貝塚で、貝塚としては豊橋市内で最古の遺跡である（図1）。遺跡の中心は旧・大聖寺境内で、豊川左岸に東西に延びる低位段丘・豊橋面の端に立地し、北側には段丘崖が迫る。標高は約6～7mである。遺跡東側の住宅地は戦時中の空襲被害を免れたために戦災復興事業施工区域から除外され（豊橋市戦災復興誌編纂委員会編1958）、古い地割が残る。対する西側には鉄道用地が広がる。久永春男らにより数度の発掘調査が行われ、縄文時代前期の石塚下層式土器および同上層式土器の標識遺跡として知られる。

さて、令和元（2019）年、旧・大聖寺境内において豊橋市教育委員会が石塚貝塚の確認調査を実施し、縄文時代の貝層等を確認した（図2）。旧・大聖寺境内は、久永らが調査を行った場所でもある。寺院旧境内であることから、調査着手時点では大きな地形の改変は行われていないと筆者は想定していた。ところが、確認調査では地表面下のごく浅い深度から貝層が検出された上に、久永らの発掘で確認されたような明確に上下に分層される貝層を確認することは出来なかった。このことは、想定に反して地形が大きく改変された可能性を示唆する。

以上を踏まえ、本稿では、これまでの調査研究史を振ることで、石塚貝塚における地形改変の情報を整理すると共に、残された記録から久永らが行った調査地点について検討する。



図1 石塚貝塚位置図 (1/5,000)



※図2 石塚貝塚確認調査 調査区配置図 (1/200)

## 2. これまでの石塚貝塚の調査研究

### (1) 石塚貝塚の発見と豊橋郷土史友会の活動 (1920年代まで)

『豊橋寺院誌』(豊橋寺院誌編纂委員会編 1954)によれば、明王山大聖寺は、明治39(1906)年に豊橋市松葉町から豊橋市花田町字石塚88に移転したという。移転先にあった石塚庚申堂は、寛政年間(1789～1801年)頃に建てられたとされ、『参河国名所図絵』に記述が見られる(愛知県郷土資料刊行会 1972)。また、『三河国吉田名蹤綜録』には段丘端に林に囲まれて建つ「石塚庚申社」が描かれている(豊橋市史編纂委員会編 1997)。石塚庚申堂は明治31(1899)年に建て替えられており、大聖寺は建て替え後の庚申堂を本堂とした。『豊橋寺院誌』の「庚申堂取毀の後、堂趾の考古学調査が進められているが未だその成果の発表がない。」という記述から、庚申堂は元とは異なる位置に建て替えられ、その跡地で発掘調査が行われたことが窺われる。なお、この「考古学調査」の具体的な実施時期と調査主体者は不明である。

大聖寺の移転後に石塚貝塚は発見された。『豊橋寺院誌』には、大正初(1912)年に豊田珍比古(伊三美)により発見されたと記述されているが、遺跡としての石塚貝塚に関する記述は、大正12(1923)年のものが初出のようである。これに先立つ大正10(1921)年に丸地古城(幸之助)や豊田らにより豊橋郷土史友会が結成され(註2)、その活動により石塚貝塚を含む豊橋市内の遺跡が

相次いで発見されている（丸地 1923）。このことから、石塚貝塚の発見は 1920 年代初頭頃と考えた方が妥当であろう。当時の大聖寺境内は、その約 2 / 3 が貝層で覆われ、本堂が建つ地盤は周囲よりも 1 尺（30cm）程高くなっていたという（丸地 1923）。本堂が建つ地盤が周囲よりも一段高いことと本堂下の地盤が貝層であることから、丸地は境内地全体が削平されたと推定している。同様の記述は、豊田も書き残している（豊田 1923）。貝層は段丘崖に沿って広がっていたらしく、丸地は「貝塚は細く長く断崖に添い石塚踏切辺まで延びていたと思われる」と想定している（註 3）。また、豊田は貝塚の一部を発掘しており、貝層の厚さを約 3 尺（約 90cm）と記載している。

## （2）久永春男らによる調査（1937～1956 年）

昭和 12（1937）年に豊橋に移住した久永春男は、これと前後して考古学を志し、東京帝国大学の講義を聴講するなどして独学で考古学を身に付け、各地で発掘調査を進めていく（野帳の会・若潮編集委員会 2012）。石塚貝塚もその一つであり、今日の石塚貝塚の評価は久永らの調査に拠るところが大きい。しかしながら、調査報告がまとめられなかったこともあり、調査内容には不明な点が多い。以下、公開された久永の野帳に残された調査記録（野帳の会事務局 2013 以下、「野帳」とする）を手掛かりに、調査と現地の地形に関する記述を整理する。

久永が石塚貝塚に言及した初出は、「三河国における縄文式文化の編年について」（久永 1940）においてであろう。縄文時代前期のものとして石塚貝塚と出土土器を紹介するが、出土土器の時期差に関する記述は見られない。また、この土器については、自身の発掘調査により得られたものかなど、その由来は不明である。

野帳における石塚貝塚に関する記述は、昭和 15（1940）年 1 月 18 日のものが初出である。しかしながら、「去年の地点につゞく堂の横の通路を掘る」とあることから、少なくとも前年にも発掘調査を行ったことがわかる。昭和 15 年 1 月 18 日の調査では、南北を建物に挟まれた通路に調査区を設けている。続く 1 月 22 日と 23 日の記述に付された位置図には、貝塚北側に迫る段丘崖のラインが通路北側の本堂と思しき「堂」と呼ばれる建物のすぐ西側に表現されている。1 月 22 日に久永は「堂」の床下を調査し、厚さ 1 尺 6 寸（約 50cm）の貝層を確認している。上層の貝層にハマグリが多く、下層はハイガイの量が増す傾向があり「細線指痕薄手の土器片」と石匙が出土したという。石匙は深度 1 尺 5 寸（約 45cm）から出土している。この時の調査所見が、後の「石塚下層式土器」および「石塚上層式土器」の設定根拠となる（久永 1946・1948）。なお、「堂」は直接貝層上に建てられていたと記述されており、前述の豊田と丸地の記述と一致する。久永は、翌 1 月 23 日にも発掘調査を行っている。この年の久永による調査区の位置と調査区の平面図・断面図は図 3 の通りである。土層堆積に関する記述を確認すると、上層の貝層に対しては「混土礫貝層」「混土貝層」と、下層の貝層に対しては「貝層」「下層ほど貝多し」とある。このことから、上層の貝層には土が多く混じり、下層の貝層は上層に比べて貝殻の割合が多いことがわかる。

昭和 19（1944）年 2 月 19 日の記述では、土器片 2 点が表採されたことが記されている。また、「西側の笹やぶ畑になり貝が散らばっているが、貝層はない。」という記述が見られることから、本堂より西側の土地が畑地に改変されていることが窺われる。

昭和 19（1944）年に出征した久永は、昭和 21（1946）年 2 月に中国から復員し、昭和 15（1940）年に行った調査の概要をまとめている（久永 1946）。この中で、石塚貝塚における層序と縄文土器の時期差について、初めて刊行物の中で触れている。同様の記述は『三河の貝塚』（久永 1948）でも見られ、下層出土の土器を縄文早期に、上層出土の土器を縄文前期に位置付けている。出土土器の時期に関する認識は、後年の「解説 三河の縄文土器」（久永 1953）に引き継がれる。

昭和 22（1947）年 1 月 17 日、江坂輝弥と吉田格が石塚貝塚を訪れる前日に、久永と紅村弘が「元庚申堂跡」を試掘している。試掘場所は、「以前に私の発掘した西端 2 m × 2 m につづけて巾（南北）1 m 長さ（東西）2 m はかりのトレンチ」と野帳にある。久永は、試掘箇所<sup>マ</sup>の東端では純貝

層が見られなくなることから、貝層が攪乱を受けた可能性を指摘している。同日の午後は、雨天のため「住宅内土間」を試掘したところ、西側から「新しい人骨」が出土し、北側には「上層式土器」を包含する純貝層が認められたという。この日の調査所見について、久永は「下層式貝塚は西側に築成され、その上部から東方にかけて上層式貝塚が築かれたものごとくである。」と野帳に記しているが、貝塚の形成過程に関する具体的な根拠は見出せない。また、この午後の調査地点は、「氏発掘地点の東」とだけ記載され、具体的な場所は不明である。

翌1月18日に江坂と吉田が石塚貝塚を訪れ、少なくとも吉田は発掘調査を行っている。吉田が発掘した本堂の西側の場所は、1月17日に久永が調査した地点の東4～5mの場所で、元の庚申堂前であるという。ここでは純貝層が検出され、上層と下層に分層出来たとされる。

翌昭和23(1948)年の野帳の記載には石塚貝塚発掘調査の記述は確認出来ないが、12月31日の「山積している発掘報告」一覧に豊橋市石塚貝塚の項目があり、「三河における縄文式早期と前期。石塚式の設定」と添えられている。しかしながら、その後も久永自身による石塚下層式土器および同上層式土器の型式設定は行われていない。野帳にはこれより後の石塚貝塚の発掘調査記録は見当たらないが、久永による発掘調査は昭和31(1956)年まで行われたという(岩瀬1994)。

後年、紅村弘は、石塚貝塚を紹介する中で、下層出土土器を縄文前期前葉に上層出土土器を縄文前期前葉以降に位置付けると共に、「前者は石塚下層式、後者は同上層式と呼ばれている。」と述べている(紅村1963)。紅村の記述からは、久永自身により型式設定されなかったにも拘らず、久永らの発掘調査成果を基に、石塚上層式および石塚下層式という土器型式に対する認識が広く受け入れられたことが窺われる。

### (3) 既存資料の整理報告(1990年代～2000年代)

久永らによる発掘調査以降、長らく石塚貝塚の発掘調査は行われなかった。また、前述のように、石塚貝塚を紹介するものはあるが(紅村1963)、発掘調査の全容を報告するものではない。

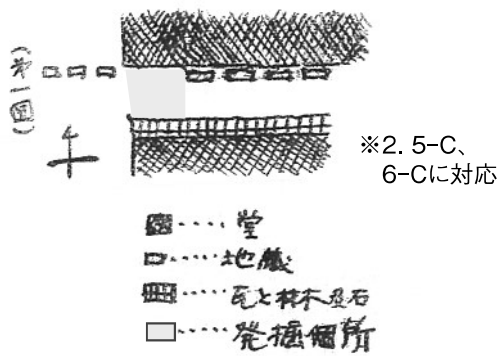
1990年代になると、過去の出土資料の整理報告が行われる。岩瀬彰利は石塚貝塚出土土器の整理報告を行い、出土土器の詳細が明らかとなった(岩瀬1994)。また、岩瀬の報告を基に、渡辺誠が石塚貝塚の概要をまとめている(渡辺2002)。

### (4) 豊橋市教育委員会による確認調査および立会調査(2000年代～)

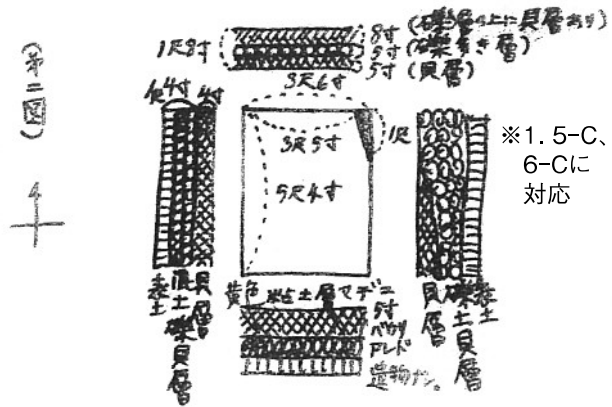
2000年代後半から、石塚貝塚では豊橋市教育委員会による確認調査および立会調査が複数回実施されてきた。しかしながら、前述の旧・大聖寺境内で実施した確認調査を除き、貝層および縄文時代の遺物・遺物は確認されなかった。このことから、石塚貝塚が残存するのは旧・大聖寺境内周辺のごく限られた範囲である可能性が高い(図2)。また、この調査で確認された貝層は、厚いところで40cm程である。前述のとおり、久永が「堂」下で確認した貝層の厚さが50cm程であることから、その後に地表面の削平が進んだことが窺われる。なお、令和元年に実施した確認調査の資料は報告書刊行に向けて整理作業中であり、詳細については後日刊行される報告書に譲りたい。

## 3. 久永らの調査地点の検討

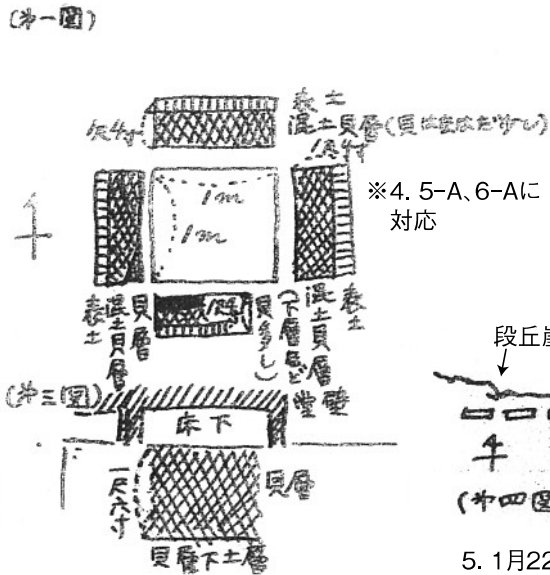
前述のように、過去の調査記録から(丸地1923、豊田1923、野帳の会事務局2013)、大正12(1923)年時点において旧・大聖寺境内地は元々の地表面から30cm以上の削平を受けていると推定される。その時期は不明であるが、石塚庚申堂が建てられた寛政年間(1789～1801年)、あるいは石塚庚申堂が建替えられた明治31(1899)年の可能性がある。では、石塚貝塚の評価の基となった久永らの調査地点は何か。



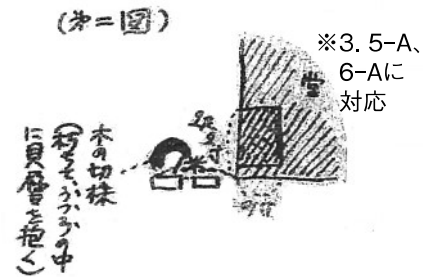
1. 1月18日付 調査区位置図(一部加筆)



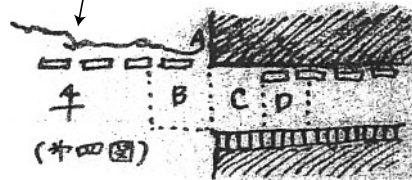
2. 1月18日付 調査区平面図・断面図(一部加筆)



3. 1月22日付「堂」下調査区  
平面図・断面図(一部加筆)

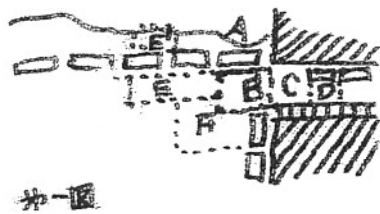


4. 1月22日付「堂」下調査区位置図(一部加筆)



5. 1月22日付 調査区位置図(一部加筆)

A: 1月22日「堂」下調査区  
B: 昭和14(1939)年調査区  
C: 1月18日調査区  
D: 1月22日調査区



6. 1月23日付 調査区位置図(一部加筆)

A: 1月22日「堂」下調査区  
B: 昭和14(1939)年調査区  
C: 1月18日調査区  
D: 1月22日調査区  
E: 1月23日調査区  
E': 1月23日調査区  
(崖崩れの危険性があるため  
途中で作業中止)  
F: 次回調査予定地

図3 久永春男による昭和15(1940)年の石塚貝塚調査図(野帳の会事務局2013より)

### (1) 石塚貝塚周辺の区割りの変遷

久永らの調査地点を検討する前に、現地周辺の区割りと土地改変の変遷を確認する必要がある。周辺区割りの変化に伴い、旧・大聖寺境内に対して何らかの土地改変が行われた可能性が考えられるためである。ここでは、豊橋市中央図書館所蔵の地図と豊橋市都市計画基本図から、石塚貝塚周辺の区割りと土地改変の変遷を確認する。

図4-1は明治37(1903)年の地図である。庚申堂の表記があり(a)、そのすぐ東側に段丘下へ下る道が確認出来る(b)。さらに東側には段丘崖に添って下る道が確認出来る(c)。この二つの道は現存する。この内、庚申堂すぐ東側の道は、次に挙げる明治40年の地図(図4-2)から昭和6年(図4-5)までの地図には表記が見られない。おそらく、道幅が狭いためであろう。

図4-2は明治40(1907)年の地図である。大聖寺の建物が表現され(d)、それより東に段丘崖に添って下る道が確認出来る(e)。その一方、前述のとおり、大聖寺境内前から段丘を下る道は見られない。段丘下には東西に延びる水路らしき表現が認められる。なお、大聖寺の建物については、大正9(1920)年の地図(図4-3f)と大きく異なるが、その理由は不明である。

昭和2(1927)年の地図(図4-4)では大聖寺境内地が色分けされ、その凡その範囲が確認出来る(g)。また、大聖寺より南側の区割りが変化している(h)。

昭和6(1931)年の地図には大きな変化は見られない(図4-5)。大聖寺本堂の表現は大正9年の地図(図4-3)とほぼ同じである。

久永春男らが石塚貝塚の調査を開始した昭和14(1939)年の地図(図4-6)には大聖寺のすぐ東側に段丘を下る道が再び表現される(i)と共に、大聖寺南側の区割りが大きく変化する(j)。また、大聖寺境内北側に小さな区割りが新たに表現されている(k)。それ以前の地図との比較から、土地を文筆の上、盤下げしたものと考えられる。

昭和18(1943)年の地図には大きな変化は認められない(図4-7)。

戦後の昭和28(1953)年の地図には、大聖寺境内地北側に建物が表現されている(図-81)。

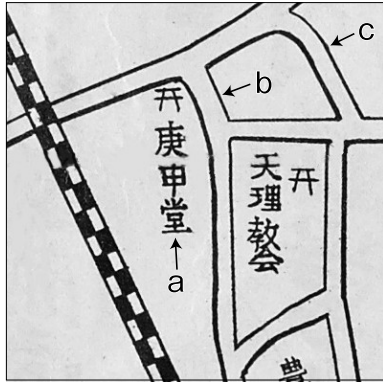
昭和36(1961)年の都市計画基本図(図4-9)にも当該建物が表現され(m)、その西側の土地には荒地となっている(n)。この荒地のすぐ南側では、南に膨らむ等高線が間隔を詰めて表現されている。等高線の表現から、段丘崖のラインがやや南側に膨らんでいたことがわかる。

昭和45(1965)年の都市計画基本図では、この荒地周辺が大きく削平されている(図4-10o)。

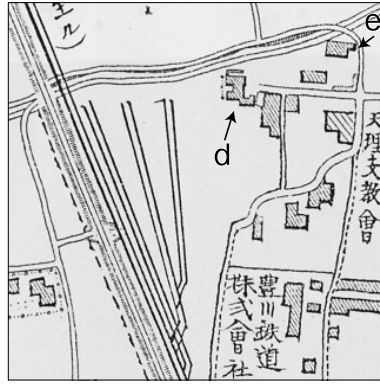
### (2) 久永らの調査位置の検討

久永が野帳に残した調査区配置図には、「堂」の西側に段丘崖と思われる表現が見られる(図3-5)。ここでは、段丘崖ラインよりも北側に「堂」の範囲が広がるように表現されている。「堂」が建つ部分では、その西側よりも段丘が北側に広がっていたことが窺われる。このことから、久永らが調査した地点は、段丘崖のラインが変化する場所の周辺であると考えられる。

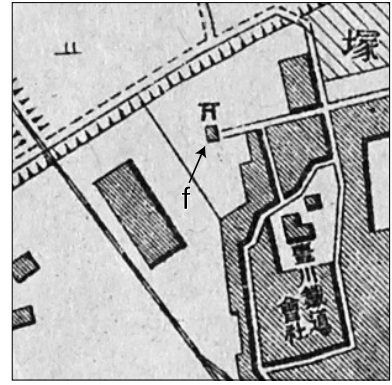
以上の条件と合致する調査区の比定地には、二つの候補がある。一つは、昭和36年の都市計画図では南へ段丘崖が膨らみ(図4-9n)、昭和45年の都市計画図では既に盤下げされている箇所(図4-10o)である。もう一つは、昭和14年頃に盤下げされた箇所である(図4-6k)。両者とも決め手に欠けるが、より可能性が高いのは前者である。その第1の根拠として、後者候補地である旧・大聖寺境内東側では貝層が確認できないことが挙げられる。第2の根拠としては、豊橋市教育委員会の確認調査において貝層を確認した範囲に久永らの調査区位置が含まれるとすると、より矛盾が少ないことが挙げられる。以上から、久永らによる調査区は、旧・大聖寺境内の西半分から、現在は盤下げされている西に接する隣地にかけての範囲であると推定される。



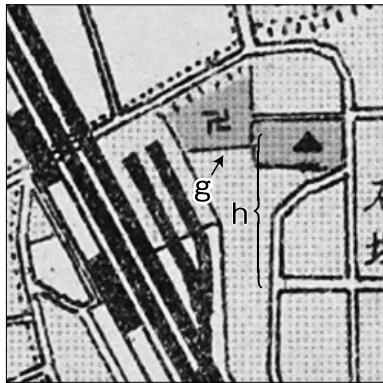
1. 豊橋市街全図 明治37年版



2. 豊橋市街全図 5000分の1  
明治四十年十一月廿三日発行複製



3. 豊橋市全図 縮尺一万二千人一  
大正9年



4. 豊橋市小字入明細図  
一万二千五百分一 昭和2年



5. 豊橋及其近郊 二万分一  
昭和6年



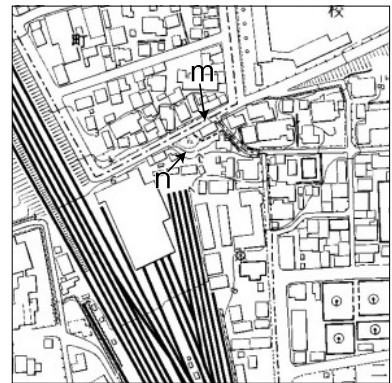
6. 最新豊橋市街地図番地入  
縮尺：一万分の一 昭和14年



7. 最新豊橋市街地図番地入  
縮尺：一万分の一 昭和18年



8. 最新豊橋市街地図番地入  
縮尺：一万分の一 昭和28年



9. 豊橋市都市計画基本図  
昭和36年



10. 豊橋市都市計画基本図  
昭和45年

※掲載に際して縮尺を任意に変更している。  
 ※各図に適宜加筆している。  
 ※1～8：画像提供 豊橋市中央図書館  
 ※9・10：画像提供 東三河広域連合

図4 石塚貝塚周辺の地形図変遷

#### 4. おわりに

以上、石塚貝塚の調査研究史を振り、大正12(1912)年には現地の地表面は削平を受けていたことを確認し、久永らによる調査地点を推定した。また、久永らの調査より後に、更なる削平を受けている可能性があることが判明した。今後、久永が残した貝層の堆積状況に関する記録と豊橋市教育委員会の確認調査記録とを比較し、更に検討することが必要である。

謝辞 本稿を執筆するにあたり、石川明弘・森田勝三・鶴田知大の各氏からはご指導とご教示を頂きました。また、豊橋市中央図書館と東三河広域連合からは画像の提供を受けました。末筆になりましたが、ここに記して謝意を表します。

(豊橋市文化財センター主任学芸員)

#### 註

- 1 『参河国名所図絵』の記載は次の通りである。「庚申堂 同村(羽田村のこと：引用者補足)の中石塚と云処に在寛政の頃庚申の刻石を掘出す元禄年中の刻書あり則堂を建縁日には諸人群集して歩を運ふ最靈驗あり三河古老傳に云三鑑に云長承三甲寅十二月三河国石降又延宝元庚戌正眞見塚村境地の辺石夥敷降其石を道十町余り越て捨る誰云うともなく石塚とぞ申けるとあり此の石吉田城を築きし時用ひたりとぞ」
- 2 『豊橋郷土史友会誌』1(私家本)の表紙裏に残された名簿には、丸地古城、豊田伊三美の他、大口翁山(喜六、初代豊橋市長)、伊藤培風(卯一、豊橋裁縫女学校創設者、俳人)などの名前が並ぶ。
- 3 「石塚踏切」と表記のある地図・図面は確認出来なかった。しかしながら、図3-1~7では、大聖寺の北を東西に延びる道が東海道本線を横切るように表現されており、この場所が石塚踏切であると推定される。

#### 参考文献

- 愛知県郷土資料刊行会 1972『参河国名所図絵』(中巻)  
岩瀬彰利 1994「愛知県豊橋市石塚貝塚の検討」『考古学フォーラム』4 考古学フォーラム  
紅村弘 1963『東海の先史時代・綜括編』名古屋鉄道  
豊田伊三美 1923「豊橋市内石塚貝塚」『人類学雑誌』第38巻第3号 東京人類学会  
豊橋寺院誌編纂委員会 1954『豊橋寺院誌』豊橋仏教会  
豊橋市史編纂委員会編 1997『三河国吉田名蹤綜録』豊橋市  
豊橋市戦災復興誌編纂委員会編 1958『豊橋市戦災復興誌』豊橋市  
久永春男 1940「三河国における縄文式文化の編年について」『ひだびと』第8号 飛騨考古土俗學會  
久永春男 1946「オセンベ土器 豊橋市石塚貝塚の土器について」『豊橋文化』第1巻第5号 豊橋文化協会  
久永春男 1948『三河の貝塚』豊橋史談会  
久永春男 1953「解説 三河の縄文土器」『豊橋市公民館郷土室資料目録』  
丸地古城 1923「考古学から見た豊橋」『郷土』第二巻第二号  
野帳の会事務局 2013『久永春男遺跡調査日誌-昭和15年・昭和19年・昭和21年~昭和25年-』  
野帳の会・若潮編集委員会編 2012『久永春男先生と野帳の会・若潮』板倉ミチ・七原恵史発行  
渡邊誠 2002「石塚貝塚」『愛知県史 資料編1 考古1 旧石器・縄文』愛知県